

■ 編集だより

編集後記

株価が8000円割れ、アメリカの金融・住宅バブルが破裂し世界恐慌の再来かと騒がれている昨今である。失われた10年などと日本衰退論が紙面を賑やかしていたかと思えば、今度は日本待望論が出てくる始末。いったい世の中はどうなっているのやら。マスコミの節操のなさには呆れるばかりである。デリバティブだのレバレッジだのと耳慣れない用語が氾濫しているが、要するに体の良い博打にすぎないのである。究極の金融商品とは笑止千万ではないか。インテリの博打好きが編み出したものにすぎないのである。世界中が博打に熱中し、それが見事に破綻したのである。楽をして金をもうけようとする輩がいつの世にも現れるものである。今回の惨状も数年過ぎれば、「喉元過ぎれば……」なんとかでまた同じ事の繰り返しと相場が決まっている。旧約聖書のソドムとゴモラではないが同じことの繰り返し、本当に人間とは愚かなものである。極東の島国である日本においては、嘗ては外の世界との交流がほとんどなく、貧しい時代がずーと続いてきたおかげで、「人はこつこつと働いて、物を作って商いをして汗水流して稼ぐのですよ」と言われ続けてきたわけである。それが戦後の高度成長期に一気に様相が変わったのである。世界有数の金持ちになり我が世の春を謳歌しているのである。

物質的豊かさはどうも幸せとは結びつかないようである。むしろ反比例するようである。文明とはかならず衰退するものであるが、右肩上がりの時代は活力があり、大きな問題もなく経過するが、頂点を極めて下りに差し掛かると数々の問題が噴出するようである。まずは次世代を担う子供たちの活力が萎え、傷ついていくのであろう。母性が希薄になり、母親による虐待や子殺しのなんと多いことか。NEETと呼ばれる一群などはまさにそれに該当するものである。世代を経るごとに活力が低下し最終的にその文明が滅亡するのであろう。

精神医学はこのような文明の衰退時に勃興するようである。黄昏のハプスブルグのウイーンにフロイトが出現し、西欧からアメリカに移り今アジアに精神医学の波が押し寄せているようである。

木下利彦